

山崎闇齋・浅見綱齋と『家礼』

——『文会筆録』『家礼師説』『喪祭小記』など

吾 妻 重 二

YAMAZAKI Ansai, ASAMI Keisai and Zhuxi's "*Family Rituals*":
on Bunkai-hitsuroku, Karei-shisetsu, Sousai-shouki, etc.

AZUMA Juji

The Kimon school, which began with Yamazaki Ansai, formed a unique school that is characterized by strict self-cultivation among the Zhuxi's thought in Edo period of Japan.

The Kimon school had the sincerity to reflect on the matters presented by Zhuxi as their own problems and to put them into practice, which was also directed toward "*Family Rituals*" is a book that answers the serious question "How to bury and honor deceased parents" from the standpoint of Confucianism, and its description seems to have been taken as a particularly important guideline by the Sakimon school, who were respectful scholars of Zhuxi. This is probably the reason why scholars of the Kimon school left many writings on "*Family Rituals*." Here I would like to discuss the writings of Ansai and Keisai who started this trend, such as "Bunkai-hitsuroku," "Karei-shietsu" and "Sousai-syoki" etc. mainly from a bibliographical viewpoint.

Keywords: *Zhuxi's* Thought, Kimon School, Funeral and Ancestral Rituals,
WAKABAYASHI Kyosai, Obama Clan

キーワード：朱子学、崎門派、喪祭儀礼、若林強齋、小浜藩

はじめに

山崎闇齋に始まる崎門派は日本近世の朱子学派の中でも厳しい自己修養と特色とする独自の学統を形成し、その影響も大きい。

崎門派には朱子学の提示した事項をみずからの問題として反芻し、実践しようとする真摯さがあり、それは『家礼』に対しても向けられた。『家礼』とは「亡くなった親をどう葬り、祭るのか」という切実な問いに儒家の立場から応えてくれる書物であり、その記述は謹厳な朱子学者であった崎門派の人々にとってとりわけ重要な指針として受けとめられたようである。崎門派の人々が『家礼』について多くの

著述を残したのはそうしたところに理由があると考えられ、ここではその流れを開いた闇齋と綱齋の著述、すなわち『文会筆録』『家礼師説』『喪祭小記』などにつき、主に書誌学的観点から述べたい。

これらの著述は従来から知られており、特に『文会筆録』は闇齋の代表的著作として周知のところが、その『家礼』部分に関してはなお検討の余地があり、『家礼師説』『喪祭小記』についてもテキスト上の問題が残るからである¹⁾。

一 山崎闇齋『文会筆録』（家礼部分）

1 山崎闇齋と朱子学

山崎闇齋（1618-1682）は、名は嘉、字は敬義、幼名は長吉、通称は嘉右衛門。神道上の別号は垂加という。京都の鍼灸医の子として生まれ、京都妙心寺の僧として修業するが、19歳のときに土佐に移り、藩政を担っていた野中兼山（1615-1664）らと親交を結ぶとともに、儒者谷時中（1598-1650）に学んで朱子学を開眼する。かくして25歳の時に仏教を棄てて儒者に転向したため、藩主の怒りを受けて土佐を追放される。

京都に戻った闇齋は朱子学の信奉者として学問と著述に専念、明暦元年（1655）38歳で開塾した。講義は峻厳この上なく、聞く者はみな凜然として仰ぎ見たという。その後、江戸で笠間藩主や大洲藩主の知遇を受け、寛文5年（1665）48歳の時には会津藩主保科正之（1611-1673）の賓師となり、厚遇された。四方より従学する者きわめて多く、佐藤直方、浅見綱齋、三宅尚齋の崎門三傑らが輩出し、門下は活況を呈する。伊藤仁齋（1627-1705）や中村惕齋（1629-1702）よりやや年長で、当時の京都を代表する学者としてともに名望を集めたことはいうまでもない。

ただし、寛文11年（1671）、54歳の頃から吉川惟足の影響から神道に接近して独自の「垂加神道」を唱えるようになり、それが佐藤直方や浅見綱齋と義絶するきっかけにもなった。しかし実践躬行と自己修養を重んじる闇齋の朱子学はその後、幕末からさらには明治期に至るまで継承され、いわゆる「崎門派」として大きな潮流を作り出すことになるのである。

闇齋の著述は、よく知られるように『四書集注』『近思録』『小学』など朱熹の著述を祖述し敷衍する形式が多く、『文会筆録』はその代表的な著作である。これを含めて、その著作は現在、『新編 山崎闇齋全集』全五巻（ぺりかん社影印、1978年、もと日本古典学会、1936年）に集められている。

2 『文会筆録』と『家礼』

『文会筆録』は全二十巻、十五冊で、朱熹や周惇頤、張載、二程、邵雍ら道学者をはじめ宋元明の儒者、あるいは李滉など中国・朝鮮の朱子学関係の著作から記述を抜粋し、時折り自注を加えている。一種の読書ノートというべき著述であるが、膨大な書物群の中から必要な関連記事を抜き出して整理しており、闇齋の生涯にわたる読書研鑽の結晶ともいうべき資料集となっている。

1) 本稿は吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』九（関西大学東西学術研究資料集刊27-9、関西大学出版部、2021年）の解説を補訂したものである。

『文会筆録』は、巻末刊記に「天和三癸亥曆 五月吉旦／二條通松屋町 壽文堂藏板」とあるように、闇齋死去翌年の天和3年（1683）5月、京都の書肆、寿文堂から刊行された。その後、享保6年（1721）の跋をもつ刊本『垂加草』三十巻附録二巻のうちの巻十二から巻二十五にそのまま収められ、『新編 山崎闇齋全集』ではこの『垂加草』版の方を載せている。

ただし、全集本はおそらく判型の関係であろう、縮小影印するにあたって原刊本にあった版心をすべて削除するほか、文字がいかにも小さく、必ずしも読みやすいテキストではない。そこでここでは天和3年版の『文会筆録』の方を用いた。使用したのは関西大学総合図書館蔵本で、請求番号は「121.43**3」、大きさは25×17.7センチである。

さて『文会筆録』につき、近藤啓吾氏は闇齋最晩年の延宝7年（1679）11月以前に成立したとっておられるが²⁾、山田慥齋『闇齋先生年譜』には、

天和二年壬戌、六十五歳。春、先生有疾、猶校訂四子抄畧、文會筆録等之書。先生於四書・五經・小學・近思錄、及濂洛關閩諸子之書、每有所得、輒撮錄爲編、題曰文會筆録、凡二十卷。……是吾所以信朱子、亦述而不作也。汝輩堅守此意而勿失。

とある。また、門人の浅見綱齋は弟子との問答の中で、

或問「文会筆録」。先生曰。此山崎先生中年所「編録」、故與「晩年之見」似、不「一樣」也。³⁾

といている。ここに記されるように、『文会筆録』は「四書・五經・小學・近思錄、及濂洛關閩諸子之書」すなわち儒教および朱子学関係の書物を読んだ闇齋が、得るところがあるたびにそれを抄録して蓄積していったもので、死去直前まで校訂を加えていたという。また綱齋の語るところによれば、中年の時期に編録したものであるため、晩年の見解とは一致しないところもあるという。かりに近藤氏のいうように延宝7年（1679）に一応成立していたとしても、資料集という性格上、抄録は早くから行なわれていたはずであり、『年譜』のいうように、それ以後もたえず校訂がなされていたと見るのがよいであろう。

この『文会筆録』で論じられた書物を順に挙げると『小学』『家礼』『近思錄』『大学』『論語』『孟子』『中庸』『易』『書』『詩』『礼楽』『春秋』となっており、『家礼』は巻一之二および一之三を占め、『小学』について2番目に置かれるとともに、四書その他と同列に扱われていることが注意される。『文会筆録』では当該巻頭に記されるべきはずの「家礼」の内題がなぜか省かれており（図1）、一見、巻一之一の内題の「小学」部分が続いているかのように見えるが、そうではないので注意が必要である。

2) 近藤啓吾『續山崎闇齋の研究』（神道史研究会、1991年）246頁。

3) 西尾揚庵録「月會筆記」、近藤啓吾・金本正孝編『浅見綱齋集』（国書刊行会、1989年）661頁。

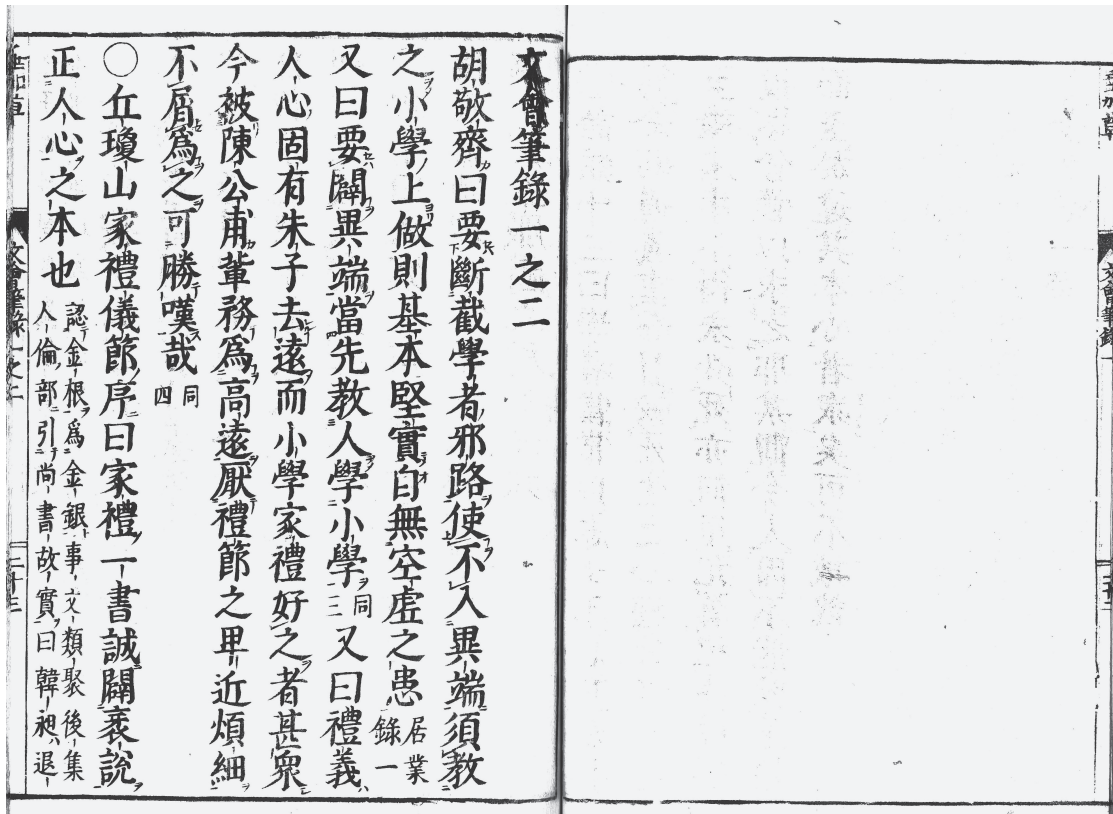


図1 『文会筆録』 卷一之二 卷頭

掲載条数も多く、『家礼』 卷一之二は57条、卷一之三是95条で合計152条が載り、これに卷三『近思録』の神主をめぐる10条を加えれば、全部で162条になる。ちなみに他の諸書に関する条数をざっと数えると、『小学』 66条、『近思録』 143条、『大学』 77条、『孟子』 152条、『中庸』 177条であるから、他の典籍に決して引けを取っていない。このことは、闇斎にとって『家礼』という文献が多くの中書の一つ——ワン・オブ・ゼム——ではなく、朱子学を構成する中心的な書物と見なされていたことを示している。

いま、ここに引用された文献を順に列挙すれば次のようになる。

卷一之二（家礼）

胡居仁『居業録』、丘濬『文公家礼儀節』、二程『程氏外書』、『朱文公文集』、同『続集』、同『別集』、丘濬『大学衍義補』、『李退溪集』、『朱子語類』、『性理大全』、黄榦『朱子行状』、羅大経『鶴林玉露』、張載『経学理窟』、蔡元定『律呂新書』、馮善『家礼集説』、司馬光『書儀』、『程氏文集』、陸羽『茶経』、『祖庭事苑』、『漢書』、『文選』、陶宗儀『輟耕録』、『五家正宗贊』、『玉篇』、『韻会』、『韻府群玉』、『万病回春』、『左伝』、『史記』、二程『程氏遺書』

卷一之三（家礼 続き）

『礼記』、『釈氏六帖』、『翰墨全書』、『三才図会』、『続資治通鑑』、朱熹『伊洛淵源録』、朱熹『詩集伝』、『皇明通紀』、蔡清『蔡虚斎集』、朱熹『資治通鑑綱目』、『張書抄略』、『篇海類編』、『彊識略』、

『餘冬序録』、『焦氏筆乘』、『禪月集』、『瀛奎律髓』、『堯山堂外紀』、『本草綱目』、朱熹・呂祖謙『近思録』、李滉『朱書節要』

卷三（近思録の家礼・神主部分）

『性理群書大全』、『大明集礼』、『大明会典』、『居家必用事類全集』、大江匡房『江談抄』、許衡『魯齋全書』、李滉『自省録』

この書目を見るだけでもきわめて広い範囲の文献を博搜渉獵していることが知られ、『家礼』解説にかける熱意が伝わってくる。このうち引用が最も多いのはもちろん『朱文公文集』と『朱子語類』だが、筆者の印象をいえば、この二書の中の『家礼』に関する記述はほぼ網羅されていると思われる。それは或る意味で当然で、闇齋は『朱文公文集』と『朱子語類』の全文をおそらく漏らさず繙読し、そこから関連記述を探し出したと思われるのである。いわゆる「つまみ食い」とは違う真摯さがここにはあるといえよう。このほか、李滉の『退溪集』や『朱書節要』、『自省録』を引用していることも注意され、『家礼』関係資料集として今なお有用な内容を持つとともに、闇齋の『家礼』学がどのようなものであったが知られるのである。

闇齋の『家礼』学について一例を挙げれば、卷三「近思録」の神主部分は『近思録』卷九・制度篇の第15条、程頤の「冠昏喪祭、禮之大者、今人都不理會」条中の「主」をめぐる議論であるが、程頤の「作主式」（『程氏文集』卷十）をはじめ関連資料を多く引用しつつ神主のつくりをみずから校定しており、その後、崎門派における神主の定式となったものである。そのことは浅見綱齋『家礼師説』や若林強齋『家礼訓蒙疏』卷三⁴⁾に示されるとおりで、いずれもこの闇齋の見解が継承されている。

ところで、闇齋が本書撰述にあたって用いた『家礼』テキストは主に性理大全本であったらしい。そう推測されるのは、たとえば「家礼序」の文字の異同につき『朱文公文集』所載の「家礼序」に触れたあと「餘皆與性理大全同」（卷一之二、24葉表）といているからで、ここで闇齋は校勘テキストとして他を挙げずに性理大全本のみを挙げている。このほか「性理大全、祠堂小註、司馬温公曰……劉氏垓孫曰」（同、25葉）、「俗節、小註楊氏條」（同、43葉表）、「小註高氏言……胡氏謂」（卷一之三、48葉裏）、「小註司馬光曰……北溪陳氏曰」（卷一之三、88葉裏）などいう「小註」は、みな性理大全本のみ引用される注である。闇齋が使用したのは性理大全本一つに限らないかもしれないが、これらを見ると、性理大全本を重要な所依としていたことは明らかである。そうであれば、それは和刻本だったのであるまいか。性理大全の和刻本はすでに承応2年（1653）、小出永庵校点により「新刻性理大全」として京都の書肆から出版されているからで、右に引用した「小註」はすべてこの和刻本に見出すことができる⁵⁾。当然ながら浅見綱齋校点の五卷本『家礼』はまだこの当時刊行されておらず、しかもそれは性理大全本を底本として再編されたものであった⁶⁾。

4) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』一（関西大学東西学術研究所資料集刊27-1、関西大学出版部、2010年）206頁以下。

5) これら四つの小註の性理大全本『家礼』（和刻本）における出処は、吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』六（関西大学東西学術研究所資料集刊27-6、関西大学出版部、2016年）の250頁下右、255頁上右、273頁下左、305頁上左。

6) 和刻本「性理大全」、および綱齋校点の五卷本『家礼』については、注5 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』六

なお、あとに見るように、綱齋の『家礼師説』で用いられた『家礼』テキストも和刻本の性理大全本だったらしい。

3 闇齋と『家礼』

このように見ると、闇齋が日本における『家礼』研究の先駆者であったことがよくわかる。浅見綱齋は『家礼師説⁷⁾』の中で、

今日家禮ヲ知ルモノ、ホゞ出来タルモ山崎先生ノ功ゾ 其緒ヲウケテ手前ナド反復センギヲイタシテ 今日コレホドニ吟味ガツイタゾ (42葉裏)

と、闇齋が『家礼』研究の端緒を開いたおかげでその後、正確な「吟味」を導き出すことができるようになったと述べているが、妥当な理解といえよう。『家礼師説』にも、しばしば「山崎先生」や『文会筆録』の見解が引用されている。

そもそも闇齋は早くから『家礼』に関心をもち、またそれにもとづく儒教儀礼を実践していた。そのことは以前指摘したとおりであって、慶安3年(1650)、先祖の神主を作り、その祭祀も『家礼』によっている。そして翌年4月、土佐の野中兼山がその母を『家礼』にもとづいて盛大に儒葬した際には友人として駆けつけるとともに、その墳誌と墓表銘を撰している。このほか承応2年(1653)の姪の葬儀に際し、衣衾棺椁を『家礼』によって作り、延宝6年(1678)には会津藩士の安西平吉なる人物を『家礼』によって埋葬している。儒教儀礼文献に関していえば、野中兼山は寛文2年(1662)、朱熹『儀礼経伝通解』正篇三十七巻の和刻本を上梓しているが、これに加点し、また出版を援助したのは山崎闇齋だったらしい⁸⁾。

万治元年(1658)、闇齋41歳のときに著わされた『大和小学』の明倫第二にも『家礼』に関する見解が見られる。親の喪祭を中心とする簡単なコメントであるが、たとえば、「神主」について「孝子はかならず、此の式によりて、まつりたてまつるべし」といい、さらに、

事_レ死如_レ事_レ生といへる本文、まことに古今のまつりの本意なるべし。……或は家禮ををこなふといふままに、親の見もしたまはぬうつは物もちひ、親の前にて、しもせぬ拜の様子をし侍る、あさましくも本意をうしなへり、朱子すでにおほく俗禮をもちひ、瓊山儀節、家禮をことごとくはもちひざりし、よく古禮をかんがへ、ふかくその意をくみて、時によろしくをこなふこそ、儒者の事なるべし。

の解説の328頁以下、および317頁以下を参照されたい。なお上述したように、闇齋は『近思録』の条で「性理群書大全」を引用している。これは数多くある性理大全の一テキストで、闇齋はこちらも参照していたことになる。

7) ここでは、小浜市立図書館・酒井家文庫蔵本を用いる。後述参照。

8) 闇齋と『家礼』の実践については、注4吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』一の解説、近藤啓吾「崎門学派における朱子家礼の受容と超脱」(近藤『儒葬と神葬』、国書刊行会、1990年)95頁以下、澤井啓一『山崎闇齋』(ミネルヴァ書房、2014年)162頁以下を見られたい。

といている⁹⁾。すなわち『家礼』の原則を守りつつ、細部についてはそれに拘泥せず「ときによろしくをこなう」、すなわち日本の時宜に合わせて実施すること、それが朱熹や丘濬（瓊山）の本意にもかなうというのであって、『家礼』の日本の実践に真面目に取り組もうとするこの姿勢は、あとに見る綱齋にもはっきりと受け継がれている。

なお、山田慥齋『闇齋先生年譜』には闇齋の著作として「葬祭儀略一卷」が著録されている。しかし『新編 山崎闇齋全集』第五卷の池上幸二郎「闇齋先生著書解説」では「闇齋先生年譜に見えたり。予未だ見ず」（573頁）としており、筆者も未見である。詳細は今後の検討に俟ちたいが、あるいは徳川光圀『喪祭儀略』一冊や浅見綱齋『喪祭略記』一冊など、他の類似の文献を闇齋撰と誤解したものではなからうか。

二 浅見綱齋『家礼師説』

1 浅見綱齋と『家礼』

浅見綱齋（1652-1712）は、上述したように佐藤直方、三宅尚齋と並んで崎門三傑と称された山崎闇齋の高弟である。近江高島の人で名は安正、通称は重次郎。京都に出て医者となったが、延宝5年（1677）26歳の時に闇齋に入門する。闇齋はその5年後の天和2年（1682）に死去するから従学期間はさほど長くなく、闇齋の生前、その垂加神道や敬義内外説を批判したため義絶されたこともあるが、京都に塾を開き、生涯どこにも仕官せずに講学にとりくんで朱子学および闇齋学の解明と宣揚につとめた。正徳元年（1711）、『朱文公文集』に校訂と訓点をほどこして刊行したのも綱齋であって、着実な仕事として評価が高い。師弟間の峻厳なことは闇齋以上であったという。

著作は多いが、最もよく知られるのが『靖献遺言』八巻である。国家に身を殉じた屈原、諸葛亮、陶淵明、顔真卿、文天祥、謝枋得、劉因、方孝孺という中国の忠臣義士八人の評伝を収め、大義名分論を唱えた書として幕末の水戸学や尊王攘夷派の志士に大きな影響を与えた。文集『綱齋先生文集』十三巻も写本で伝わっている¹⁰⁾。また近藤啓吾・金本正孝編『浅見綱齋集¹¹⁾』は、一、靖献遺言、二、詩文篇、三、語録篇、四、道義諸篇に分類し、その主な著述を収めている。

綱齋は儒教儀礼に並々ならぬ関心を抱いていた。元禄4年（1691）、あとにとりあげる『喪祭小記』を著わし、翌元禄5年（1692）に『大戴礼記』を校点・刊行したことなどはそれをよく物語るもので¹²⁾、元禄10年（1697）にはさらに『家礼』五卷図一卷を校点・刊行している。これは性理大全本によりつつ『家礼』原本を復元しようとした重要な仕事であり、その後、江戸時代を通じて広く読まれた和刻テキストとなった¹³⁾。

9) 『新編 山崎闇齋全集』第四巻、164頁。また黒川真道編『日本教育文庫』教科書篇（同文館、1911年）36頁。

10) 『綱齋先生文集』（近世儒家文集集成第二巻、影印、ペリかん社、1987年）。

11) 注3に既出。

12) 「書大戴礼記後」、『綱齋先生文集』巻十一。

13) この和刻本『家礼』は注5、吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』六に収めた。またその解説を参照されたい。

その翌年の元禄11年（1698）に「読家礼¹⁴⁾」という一文を書いていることも注意すべきで、そこに、

世¹⁵⁾之譯諸和文以誘禮俗、其意非不切、而其所以書禮節之方、則因舊株守異國古制之跡、不明本邦天地一體風俗時宜之理。……頃因講禮書、竊有所感焉、因筆記如此云。

（世^{これ}の諸を和文に訳して以て礼俗^{さそ}を誘う、其の意切ならざるには非ざるも、其の礼節を書する所以の方は、則ち旧に因り異國古制の跡を株守して、本邦天地一体、風俗時宜の理に明らかならず。……頃^{この}ろ礼書を講ずるに因りて、窃^{ひそ}かに感ずる所有り、因りて筆記すること此の如しと云う。）

と見える。すなわち近年、『家礼』を和訳する人々が「礼節」を述べるにあたって「異國古制の跡」を墨守していると批判し、日本の「風俗時宜」を正しく考慮すべきだと説く。日本の変容を加えることがむしろ「天地一体」の理にかなうというこの考え方は、先に見た闇齋の思想をよく受け継ぐものである¹⁶⁾。

またここで「頃ろ礼書を講ずるに因りて」といっているから、この頃にはすでに「礼書」の講義を行っていたようである。その中心はもちろん『家礼』であったろう。こうした準備段階を経て宝永2年（1705）、『家礼』が開講され『家礼師説』として門人に記録されるのである。

2 『家礼師説』について

『家礼師説』一冊は綱齋の『家礼』講義録である。写本でのみ伝わり、上記の『綱齋先生文集』などには収められていない。筆者が使用したのは福井県・小浜市立図書館の酒井家文庫蔵本で、請求番号は「崎240」、全116葉、大きさは24×16.4センチである（以下、小浜本と称する。図2）。

14) 『綱齋先生文集』巻八。

15) 『綱齋先生文集』巻八（ぺりかん社影印）では「予」に作るが、意味が通じない。注3、近藤啓吾・金本正孝編『浅見綱齋集』の校訂により「世」に改めた。

16) 綱齋における『家礼』の日本の変容については田尻祐一郎「綱齋・強齋と『文公家礼』」（『日本思想史研究』、東北大学、1983年）、松川雅信『儒教儀礼と近世日本社会——闇齋学派の『家礼』実践』（勉誠出版、2020年）がある。とりわけ松川氏の書は最新の研究成果として注目される。

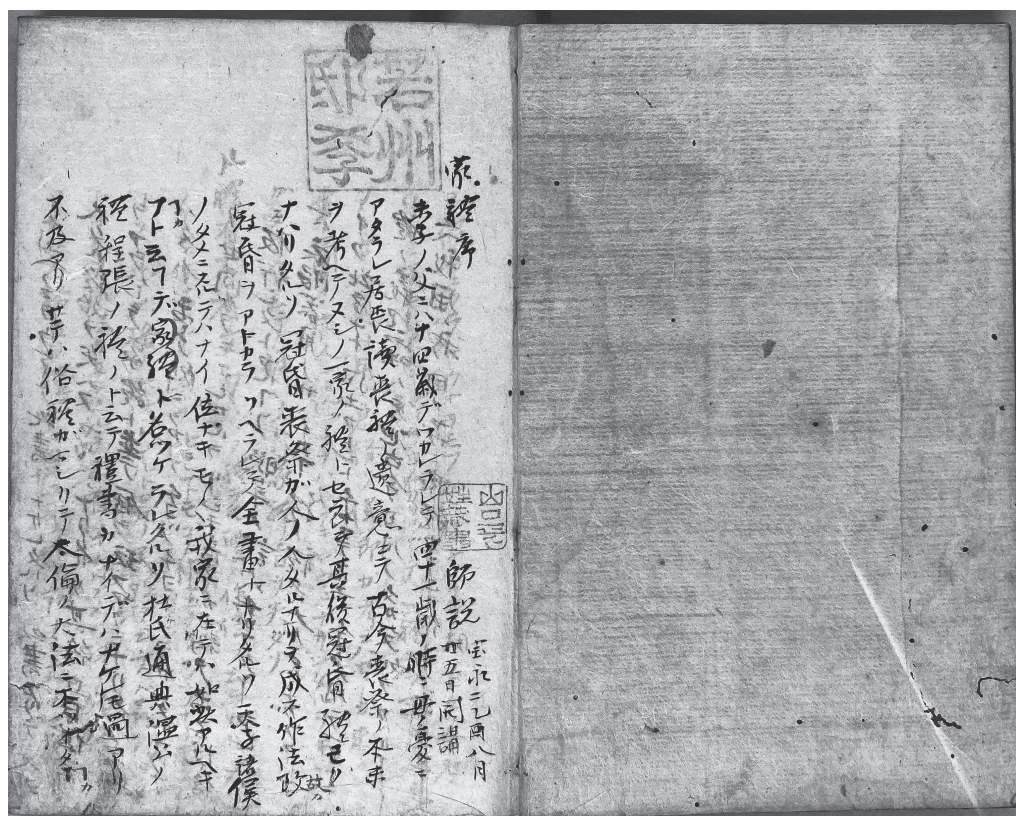


図2 『家礼師説』（小浜本）

綱齋がこの『家礼』講義を始めたのは、その冒頭に記されるとおり宝永2年（1705）8月25日、綱齋54歳の時である。また家礼序の講義の識語に、

今茲八月十一日先生ノ後母卒、先生從居喪讀喪禮之意、以講家禮喪祭之篇焉、先生服白布帷子、著廉布上下、撤見臺而用書格。（7葉裏）

とあるように、その14日前の8月11日、継母の山本幾佐が亡くなり、その喪に服しているさなかに「喪に居りては喪礼を読む」（もと『礼記』曲礼下の語、「居喪未葬、讀喪禮。既葬、讀祭禮」）の教えにより講義を始めたのである。これは、かつて朱熹が母の葬儀にあたって『家礼』を撰述したひそみにならうものでもあって、家礼序部分の冒頭に、

朱子ノ父ニハ十四歳デワカレラレテ 四十一歳ノ時ニ母ノ憂ニアタラレ 居喪讀喪禮ノ遺意ニテ 古今喪祭ノ本末ヲ考ヘテ ヌシノ一家ノ禮トセラレテ 其後冠昏禮モソナハリタルゾ（1葉表）。

とあるのはそのことを示している。講義の際に「白布帷子を服し、廉布上下を著け」たのは綱齋なりの喪服であり、「見台」（書見台）を使わずに「書格」（あとにいう「講習机」）を使ったのも謹慎のさまを表わすものであろう。

このほか綱齋門人の若林強齋「常話雑記」は、継母死去の翌日（8月12日）、鳥辺山の先塋にこれを埋葬した際の綱齋の様子を、

十二日午時葬送。僕先生ノ御供。先生ハアラギヌノ上下、白キ帷子、大小ノ柄鞘ヲ紙ニテツヽミ、足袋、草履、月代御ソリ。鳥邊ニテ御物語、忌中ニ葬祭記ヲ編ベシ。ソレニ付、禮書ノソレニアヅカル分ヲ講習シテ、ギンミヲシテキカソウ。ソレニ帶テ、今迄ノ講ジタ書ヲ講習セウ。先忌中ニハ、見臺ヲヤメテ、講習机デスルコト¹⁷⁾。

と記録している。すなわち継母を埋葬したその場で、今回の葬儀の記録を作るとともに「禮書ノソレニアヅカル分ヲ講習シテ、ギンミヲシテキカソウ」と、その決意を語ったという。ここにいう「礼書」が『家礼』であることはいうまでもない。また、この時の講義については、

先生居喪、讀レ禮ガ古人ノ意トアツテ、八月廿五日ヨリ家禮ヲ御ヨミナサレ、ソレヨリ帶テ諸書ヲ輪講アルゾ。俗禮五十日スミテ、サカヤキナサレ、世間ノ禮ヲ御ツトメナサルヽ。コレヨリ心喪ヲ三年勤テ宴會ニアヅカラヌヤウニセウトアルコト。五十四五日シテ迄アラギヌノ上下、讀書ヨマセラルヽ。ソノ後ハ下バカリニ羽織ゾ¹⁸⁾。

という記録もあって、右の記述とよく一致している。

講義の期間については、ここに「五十四五日シテ迄アラギヌノ上下、讀書ヨマセラルヽ」といわれており、また同年12月19日には「語類会約」を作って『朱子語類』の会読を始めているところからすると¹⁹⁾、講義は二、三か月ほどの間に集中的になされたようである。『家礼』の本文および原注の一字一句が噛んで含めるように説明されていて質実な姿勢がよく伝わってくる語り口である。

この『家礼師説』の筆録者ははっきりしないが、若林強齋が最もふさわしいように思われる。右の「常話雑記」の記述のほか、強齋が『家礼訓蒙疏』でしばしば綱齋の説を継承していることから、そのように推定される²⁰⁾。ただし、本テキストは筆跡から見て強齋の手写本ではないようで、また通礼・祠堂章の途中から明らかに筆跡が変わっているから複数の者による転写本であろう。行間にあとで補筆した部分があるのも、祖本が別にあり、それによって書き足したものと考えられる（5葉表、9葉表）。

17) 若林強齋録「常話雑記」。注3、近藤啓吾・金本正孝編『浅見綱齋集』567頁。なお、この記事の前後には継母山本氏の棺のつくりや埋葬方法、神主の書式も記録されていて貴重である。

18) 同上、573頁。

19) 「語類会約」、『綱齋先生文集』巻八。

20) あとに述べる山口菅山の父、山口風簷がまとめた若林強齋手沢本の目録「古先生手澤書目」（近藤啓吾『若林強齋の研究』所収、神道史学会、1979年、377頁）に「望楠之席書と相見説者録者不詳左之通」として「家禮師説 一冊」が挙げられている。これによれば本書は講義者も筆録者も未詳ということになるが、内容を見れば綱齋の講義であることは明らかであり、なぜこのように判断されたのか不明である。

3 小浜本について——狩野本との比較

さて、小浜本のテキスト関連事項について述べよう。まず巻首に「若州邸学」の印があるように若狭小浜藩（福井県）の江戸藩邸学問所の蔵書であり、また「山口平姓蔵書」の印があるので、その教授をつとめた山口菅山（1772-1854）の所伝本である²¹⁾。菅山は梅田雲浜、有馬新七ら幕末の志士を育てたことでも知られる。

そもそも小浜藩は綱齋に続く若林強齋の学問、いわゆる望楠軒の学統を忠実に受け継ぎ、藩校順造館はもちろん江戸藩邸学問所でもこれを講授した。本書を蔵する酒井家文庫は小浜藩主の酒井家が伝えた書物群で、これら藩学の崎門派文献を多く含むことはよく知られるとおりである。

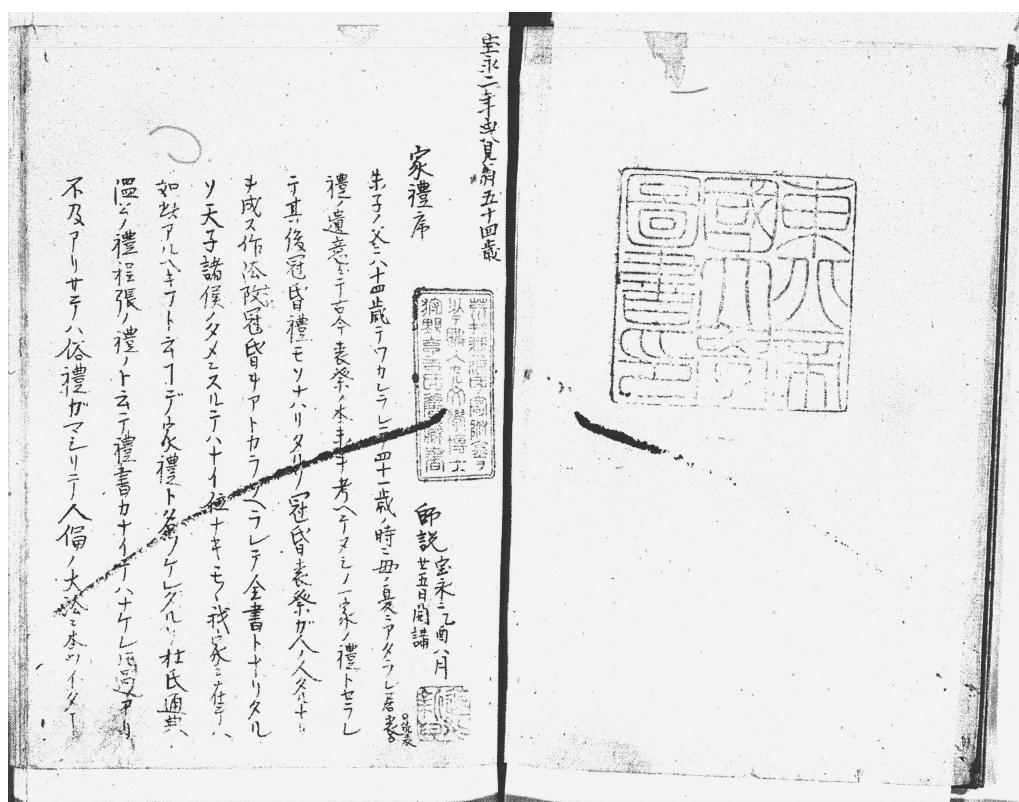


図3 『家礼師説』（狩野本）

これに関して興味深いのが東北大学附属図書館・狩野文庫蔵本（狩野本）である（図3）。従来、『家礼師説』のテキストとしてよく用いられてきたのは狩野本であるが、小浜本に比べると問題が多いので、ここで気がついた点を指摘してみたい。

21) 小浜市立図書館『酒井家文庫総合目録』（小浜市立図書館、1987年）付録二「印記集」参照。同じ印記は酒井家文庫蔵の書籍に多くみられる。このことについては小浜市教育委員会・文化課の川股寛享氏から教示を得た。感謝申し上げます。なお、大倉精神文化研究所蔵の『社倉法師説』（若林強齋筆録）などにも同じ印記が見える。阿部隆一「大倉精神文化研究所蔵 崎門学派著作文献解題」（『阿部隆一遺稿集』第三巻、汲古書院、1985年）414頁。

そもそも狩野本は、巻末の識語に、

文政七甲申初冬日／此冊子者（？）請承於山口菅山翁而謄写寫者也 橘惟一記

とあり、橘惟一なる人物が文政7年（1824）、山口菅山から借り承けて転写したものであることがわかる。

実際に両者を比較してみると、狩野本が小浜本を転写したことは明らかで、たとえば次の例からそれが知られる。

・教ベキヤウガナイ（9葉裏）

「教」の字はもと「殺」に作る。狩野本は「殺」の字の横に「教」の字を書入れて訂正しているが、これは小浜本とまったく同じである（狩野本マイクロフィルム12頁b）。

・周禮夏官（11葉表）

「夏」の字はもと「憂」に作る。狩野本は「憂」の字の右側に「夏」の字を入れて訂正しているが、これは小浜本が「夏^カ」と書入れているのによるであろう（狩野本マイクロフィルム13頁b）。

・末子モ爲嫡子服斬衰ゾ（65葉表）

この句を小浜本は旁注として書入れている。狩野本はこの句を記し、右側に「旁云」と書き入れている（狩野本マイクロフィルム74頁a）。

これらはいずれも小浜本にもとづいてなされた書入りを忠実に反映している。

ただし、この転写はかなり倉卒に行われたようで、実は狩野本には脱文や錯簡、誤字がきわめて多い。いま、それぞれ二、三例を挙げておこう。

○脱文の例

・古禮ノ今日ニ行ル、ヤウニスル衆ガアルゾ（5葉表最終行）

狩野本では「行ル、」のあとの長文がごっそり抜けており、欄外に小字で記入している（狩野本マイクロフィルム8頁b）。これは小浜本の次の一葉をまるごと書き漏らし、あとで補写したものである。なお、他の例にも見られるように、小浜本の一葉を区切りとして脱落もしくは錯簡しているのは、要するに底本が小浜本だったことを表わすものである。

・鬼神ハ祭ニシタガヒ 其氣ガアツマルユヘ（13葉表最終行）

狩野本では「ニシタガヒ」のあとの長文がこれまた脱落しており、欄外に小字で記入している（狩野本マイクロフィルム16頁a）。これまた小浜本の一葉を書き洩らし、あとで補写したのである。

・有官封則某官某封（頭注、39葉表）

狩野本は「有官」以下がぷつぷつと切れ、文章が途中で終わっていて杜撰である（狩野本マイクロフィルム43頁a）。

○錯簡の例

- ・制ハ此方デハ此方ノヤウニシタガヨイ（61葉表）

狩野本は「此方ノヤ」のあと、一葉が前後まるごと入れ替わって写されている。転写者はあとでこのことに気づき、欄外に「錯簡下」、「錯簡上」などの字を入れて訂正している（狩野本マイクロフィルム69頁b、70頁b）。

- ・抑孝思 カギリアレバ（70葉表最終行）

狩野本は「抑孝」のあと、一葉をまるまる跳ばして「モノヲ枚ト云ハアヤマリゾ」以下、五行が続いてしまっている（狩野本マイクロフィルム80頁a）。

○誤字・脱字の例

- ・飯含（50葉表、左6行目・7行目）

狩野本は二か所とも「飯食」とする。転写者は「飯含」の語をよく知らなかったようであり、軽率なミスである（狩野本マイクロフィルム56頁a）。

- ・按古者（88葉裏）

狩野本は「按」を「梅」とする。初歩的な誤りである（狩野本マイクロフィルム100頁a）。

- ・喪ハウゴカヌヲナレドモ（53葉表）

狩野本は「喪ハウカヌヲナレドモ」とし、「ゴ」（コ）の字を脱する。「ウゴカヌ」が「ウカヌ」となり、違う意味になってしまっている（狩野本マイクロフィルム59頁b）。

- ・シメリテワルイゾ（78葉裏）

狩野本は「シメリテハルヘゾ」とし、意味が通じない（狩野本マイクロフィルム89頁a）。

このほかにも狩野本には誤字や脱字がおびただしく見出され、枚挙にいとまがない。「ユヘ」（故）を「ユイ」としているのも奇妙に感じられるが、これは方言の関係であろうか。

また、頭注部分については小浜本にあるのに狩野本にはない書入れも散見され、「大全ハ詣字ゾ／見行本作詣」（71葉表）などがそうである。これは文字の校訂に関する注記で、「見行本」は「現行本」の意である。このあと七か所ほど「見行本」による注記があるが、狩野本にはまったく見られない。

やや細かな検討にわたったが、要するに狩野本は小浜本を転写したものであること、しかし誤写がきわめて多いこと、小浜本が綱齋と強齋、いわゆる望楠軒の学統をふまえた由緒正しいテキストであり、したがってまた信頼できる内容をもつことを示したかったからである。

もう一つ、小浜本の特色としては朱批・墨批の存在がある。文字の右側に朱筆で）と書き入れて『家礼』本文内の語であることを示したり、行間に「～カ」のように文字の校訂案を多く書き入れている。さらに文字左側に小さな「ヒ」の字を書き入れて誤字や衍字であることを示す場合もある。このような朱批・墨批は、筆録された師説を、弟子たちが代々継承する中で検閲、訂正、補筆して正確を期そうとしたものであって、崎門派の講義録の特色をよく示すとともに²²⁾、小浜本の信頼度を高めるものともなっ

22) 崎門派の講義録のもつこうした特色については、阿部隆一「崎門学派諸家の略伝と学風」（西順藏・阿部隆一・丸山真男校注『山崎闇齋学派』解説、日本思想大系31、岩波書店、1980年）574頁が指摘している。

ている。多く附された欄外の頭注も、そうした校正作業の中で書き加えられたものであろう。

なお、『家礼師説』には他に財団法人無窮会の織田文庫蔵本があるが、未見である。

4 『家礼師説』の文献学的特徴

さて、『家礼師説』の文献学上の特徴をいくらか指摘しておきたい。

まず、本書は「家礼序」と祠堂を含む「通礼」、そして「喪礼」と「祭礼」の二礼のみのしか述べられていないことである。このように「冠婚喪祭」の四礼のうち「冠婚」の二礼を省き「喪祭」の二礼に特化するの江戸時代の『家礼』関連文献に多く見られる特徴で、強斎の『家礼訓蒙疏』も「家礼」とはいいながら、実際には喪礼と祭礼だけを解説している。

これに関連して棺のつくり方や埋葬法、神主のつくりに関する説明が他に比べて格段に詳しいことも注意される。「治棺」(41葉表)、「治葬」(70葉裏)、「神主式」(82葉表)など、いずれも微細な点まで克明に解説しており、綱斎の関心のありかをよく示している。これらは綱斎にとって「家禮ノ一大事」であった(82葉表)。

次に、綱斎が用いた『家礼』の底本は師の山崎闇斎と同じく和刻本『性理大全』本であったらしい。前述したように、本講義が行なわれる8年前に校刊した和刻本『家礼』がそもそも性理大全を所依としていたわけだが、そのことは本講義における『家礼』の引用の仕方から確認できるので述べておきたい。

たとえば次のような文字の校訂がなされているが、ここにいう「汨」「柄」「絡」「暇」「諸」はいずれも『性理大全』本(和刻本)だけがそのように作っているものであり、これ以外にそのように作る版本は見出すことができない²³⁾。

- ・汨當作扣(72葉裏)
- ・柄ハアヤマリ 柄ガヨイ(81葉表)
- ・絡ハアヤマリ 格ガヨイ(81葉裏)
- ・暇 暇當作假(99葉表)
- ・升諸 諸ハアヤマリ 詣ノ字ゾ(108葉表)

つまり、綱斎は和刻本『性理大全』本の正文の誤字を校訂しているわけである。このほか、「大全補注」(57葉裏)を引用しているのも、綱斎が『性理大全』本によっていた証左である。このほか、頭注にも「補注」や「集覧」が多く引かれているが、調べたところ、これらもすべて和刻本『性理大全』に載っているものである。『家礼師説』がよりどころとしていた『家礼』テキストが和刻本『性理大全』本であったことは明らかであろう。

また、引用文献に関して述べれば、本書にはさまざまな文献が引かれているが、『文会筆録』を引用するのは、綱斎が師闇斎の説をよく継承していたことをよく物語っている(82葉裏、83葉表、84葉表、98

23) 『家礼』諸本における文字の異同については、吾妻重二彙校『《朱子家禮》宋本彙校』(上海古籍出版社、2020年)を見られたい。

葉裏など）。綱齋自身の『喪祭小記』も一か所引用されている（52葉裏）。興味深いのは朝鮮の曹好益『家礼考証』を活用していることで、本文でしばしば引用するほか（47葉裏、49葉、53葉表〔二か所〕、53葉裏、57葉裏）、頭注にも数多く引かれていて所説を補強するものとなっている。曹好益（1545-1609）は退溪学派の人物で、その『家礼考証』は『家礼』全般につき典拠や参考資料を示した堅実な著作である²⁴⁾。

綱齋が校刊した和刻本『家礼』との関係については、和刻本の末尾に引かれる「年譜曰云」などの記事四条について解説がなされている。

もう一つ、「手前ハ」云々という言い方で葬祭における自分の経験をしばしば語っていることも見逃さない（13葉表、42葉裏、75葉裏、76葉裏、80葉表、92葉表など）。これは観念的に論じるのではなく、実際にやってみた経験にもとづく記述であり、当時『家礼』をどのように実行したかという記録としても貴重であろう。

三 浅見綱齋の他の『家礼』関連著述

1 『喪祭小記』——『通祭喪葬小記』と『浅見先生祠堂考』

上述したように、綱齋には『喪祭小記』の著作がある。これは『家礼師説』より14年ほど前の元禄4年（1691）、40歳の時に書かれたもので、やはり写本でのみ伝わっている。筆者が調査した中で善本と思われるのは次の2本である。

『通祭喪葬小記』一冊 写本 全59葉 早稲田大学中央図書館 請求番号：ロ9-3308（図4）

『浅見先生祠堂考』一冊 写本 全56葉 財団法人無窮会・織田文庫 請求番号：オ-1538（図5）

書名は外題に書きつけられたもので互いに異なるが、内容はいずれも『喪祭小記』である。書名は『綱齋先生文集』巻十一に「跋喪祭小記」とある、その『喪祭小記』が正しいと見るべきで、それはこれらの写本の末尾に、いずれも「跋喪祭小記」を載せていることからわかる。ただ、本書にはもともと書名は記されておらず、転写者が記述内容にもとづいて外題にしたらしく、『浅見先生祠堂考』などは初めに祠堂の図が載っているためにこの名をつけたのであろう。本書には他に『通祭小記』とする写本も存在する。

24) 張東宇「朝鮮における『朱子家礼』研究」（邊英浩・鄭宰相訳、『都留文科大学研究紀要』第78集、2013年）52頁参照。

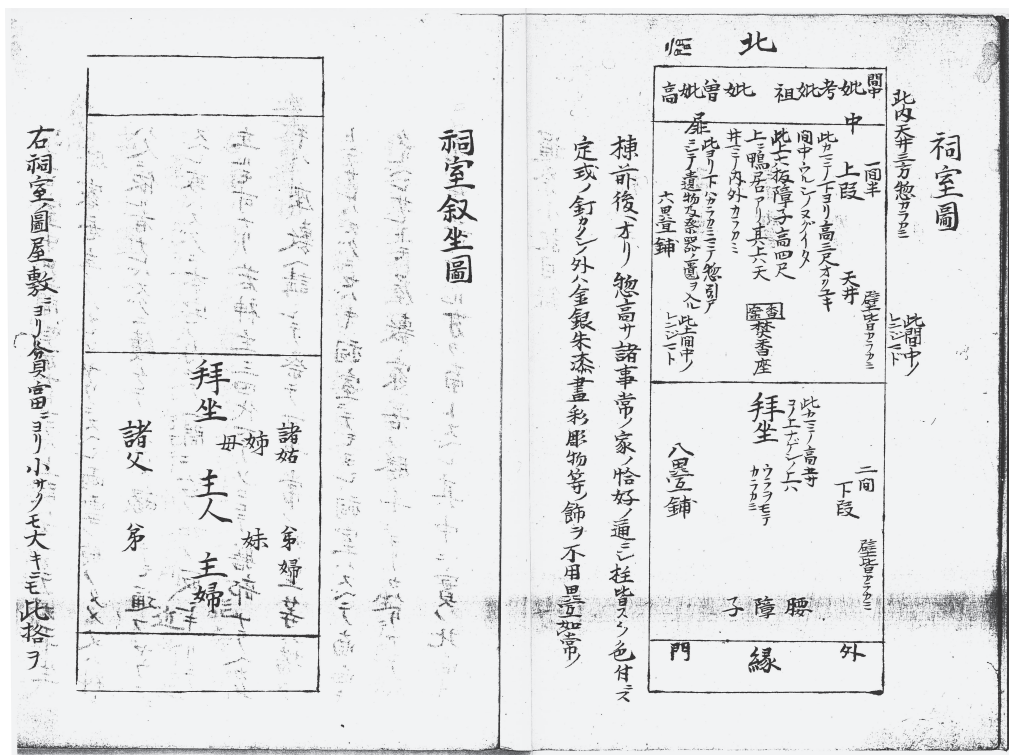


図4 『通祭喪葬小記』(早稲田大学中央図書館蔵)

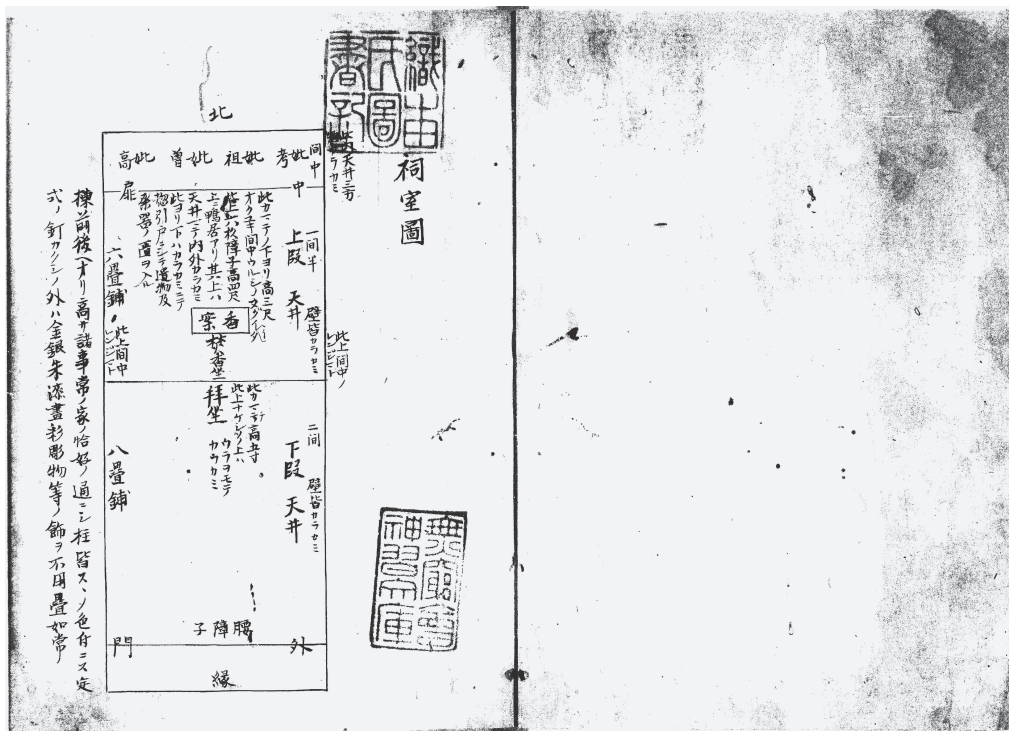


図5 『浅見先生祠堂考』(無窮会・織田文庫蔵)

内容は「通祭小記」と「喪祭小記」の二つの部分に分かれ、通祭小記は祠堂、通禮、春饗、秋饗、忌日からなり、喪葬小記は初終、歛、葬、虞、小祥、大祥、禫と続き、さらに棺槨、歛具、葬具、墓表が附されている、全体に『家礼』を簡便化したものとなっている。また「祠堂図」「祠堂叙坐図」「神主図」「櫛図」「棺」「蓋」などの図も載せて理解に便ならしめようとしているが、これらの図は『文会筆録』を補訂したもので、若林強齋『家礼訓蒙疏』所載の図に継承されていることが相互に見比べるとわかる。

これら二本はいずれも精写本としてすぐれており、ただ早稲田本は一か所落丁があるため、無窮会本で補う必要がある。すなわち「墓表」の記述の「青石デナケレバ墨」以下、二葉半ほどが早稲田本では脱落しており、そのため本来あるべき墓表の図が載っていないのである。

そもそも『喪祭小記』には数多くの写本が存在している。それはかつて呉明熙氏が指摘したとおりで²⁵⁾、なかには杜撰な筆写本も少なくない²⁶⁾。早稲田本と無窮会本の二本を呉氏はとりあげておられないが、その内容は呉氏のいう善本にほぼ一致している。

本書の撰述方針については跋文「跋喪祭小記」に示されているので、ひとまず無窮会本によって全文を掲げておく。ただ、諸本によりいくらか文字の異同があるところは注記しておいた。

跋喪祭小記

生也愛之、死也哀之、此宇宙不易之大情、人心固有之本然、不假強爲、不待他求、則慎終追遠之誠、其誰容已焉。惟汨²⁷⁾于流俗、罔於邪說、不知其所以慎之追之正²⁸⁾、則利害苟且之習、誕妄悖賊之教、誘染蔽錮、遂使夫不容已之誠、流而陷于不幸不義之罪、而不知自駭也。豈不哀哉。喪祭二儀²⁹⁾、先正禮典備矣。顧時有古今、俗有彼此、貴賤異等、貧富殊分、有未易遽以一概而處者、則儀文品節・異同損益之間、自有志者而每病焉。然嘗聞之、本立而道生。苟能反諸己、以實得其不假不求之本、則可明彼禮儀品節・統繁脈絡、舉無非以其不易固有之心、行乎不易固有之道、而參以人情之宜、酌以方俗之變、爲其所得爲、以稱有亡之節、則吾之所以必誠必信、不使土親膚、素服疏食、以盡惻怛痛疾之意、致慤以伸悽愴愴之忱者、自將有所處矣。間或詢及于此、輒據禮說、告以參酌之意、而倉卒立談之間、或不能無遺誤。因姑筆以貽同志。草簡野陋、雖不敢犯乎僭分汰哉之誚、然有志之士、因此以旁通焉、尚一掃彼³⁰⁾蔽錮誘染之陋、而使不易固有、不容已之誠無失其正之憾矣。

元禄辛未季夏之朔

浅見安正謹識

すなわち、仏教などの「邪説」に惑わされて「不幸不義之罪」に陥ることなどなく、喪礼と祭礼の二

25) 呉明熙「浅見綱齋『喪祭小記』の版本と内容について」(『中国哲学』第39号、北海道中国哲学会、2011年)。

26) 筆者も『通祭小記』と題する別本を蔵するが、誤字や脱文が多く信頼するに足りない。なお呉論文は、未完成本が世に流布したことによってさまざまな版本が生じたという。そのような側面もあるかもしれないが、むしろ転写の際に誤字・脱字などの誤りが生じたのであって、もとのテキスト自体はほぼ固定していたと見るべきである。

27) 「汨」、文集(ペリかん社影印)は「泊」、早稲田本は「汨」だが、無窮会本の「汨」が正しい。

28) 「正」、文集は「止」だが、正しくない。

29) 文集には「二儀」の字がない。

30) 文集は「波」、無窮会本は「被」に作るが、いずれも誤りで早稲田本の「彼」が正しい。

礼を正しく実施できるよう心をくだいたという。そして貴賤や貧富の違いなく実行できるよう、「不易固有之心」と「不易固有之道」によりつつ「人情之宜」と「方俗之變」を参酌したという。そして「倉卒立談」の間にまとめたため誤りもあるであろうが、同志に配布し今後の実践に役立ててほしいとっている。『家礼』の原則をふまえつつ現実に沿って応用することを目指した綱齋らしい主張といえよう。

このように本書は綱齋の覚書ふうの内容になっているが、その存在はわりあい早くから知られ、多くの転写本が作られることになった。これは『家礼師説』が小浜藩学に蔵せられてあまり世間の目に触れなかったらしいのとは対照的である。

なお小浜市立図書館の西依家文書に本書に関する草稿があり、昨年11月、筆者もこれを実見した。詳しい分析はできないが、綱齋がその後も本書をたえず校訂していたことを示す資料と思われる³¹⁾。

2 『家礼紀聞』

綱齋の『家礼』関係著述として、さらに『家礼紀聞』と『喪祭略記』がある。

まず『家礼紀聞』一冊は筑波大学附属図書館で、請求番号は「中央和装 口803-51」、「綱齋先生雑記」の第11冊として蔵される。内題は「家礼紀聞」だが、「紀聞」が正しいであろう。全26葉で大きさは 25.1×17.7センチ（図6）。

この「綱齋先生雑記」は全16冊からなり、その内容は次のとおりである。

大學定而靜講義
寶永戊子正月五日初會筆記
河圖數生出講義
一陰一陽講義
伏羲八卦圖講義
讀哀姪女文 義者心之制事之宜筆記
大學傳首章講義
詩經講義
東山口義
天人一道講義
家禮紀聞 再嫁説
小學口義
西銘講義
孟子不動心講義
大學綱目全圖

31) この草稿については近藤啓吾「榑崎家と西依家」（近藤『浅見綱齋の研究』、神道史研究会、1970年）317頁以下に言及がある。

- ・「家礼ハ事簡ニシテ」の条（5葉表）『家礼師説』：2葉表
- ・「棺板モ本マキガヨシ」の条（11葉裏）『家礼師説』：42葉表
- ・「檀弓、葬也者藏也」の条（20葉表）『家礼師説』：72葉表
- ・「神道碑」の条（22葉表）『家礼師説』：93葉表

このように、本書の記述が内容的に『家礼師説』と重なる場合があるのは当然であるが、本書が『家礼師説』の抜書きではないこと、したがってまた独自の価値をもつことが知られるであろう。

また山崎闇斎の墓碑（墓表）の図を載せるのも『家礼師説』にはないところで、江戸時代に描かれた図として貴重なものといえる。

なお、本書には「再嫁説」が合冊されている（表紙書付外題は「再嫁記」）。その識語に「貞享甲子改元年四月二十七日書于播之明石郡／人丸石下井上氏寓舎 安正」とあるので、こちらは貞享元年（1684）、綱斎33歳の作である。

3 『喪祭略記』

『喪祭略記』一冊は財団法人無窮会・平沼文庫蔵の写本で、その蔵書目録第二輯の請求番号は「9474」である。全22葉で大きさは24×18センチ、「神主書法」などと合冊されている。巻末に「平田篤胤（花押）／文化三年二月十五日」とあることから、文化3年（1806）、平田篤胤（1776-1843）によって筆写されたものらしい。現在伝わる篤胤の筆跡から見ても、なるほどそのように考えてよいと思われる³⁴⁾。また「遠湖図書」の印記があるので内田周平（1854-1944）の旧蔵書であった（図7）。

34) 『別冊太陽 知のネットワークの先覚者 平田篤胤』（平凡社、2004年）。

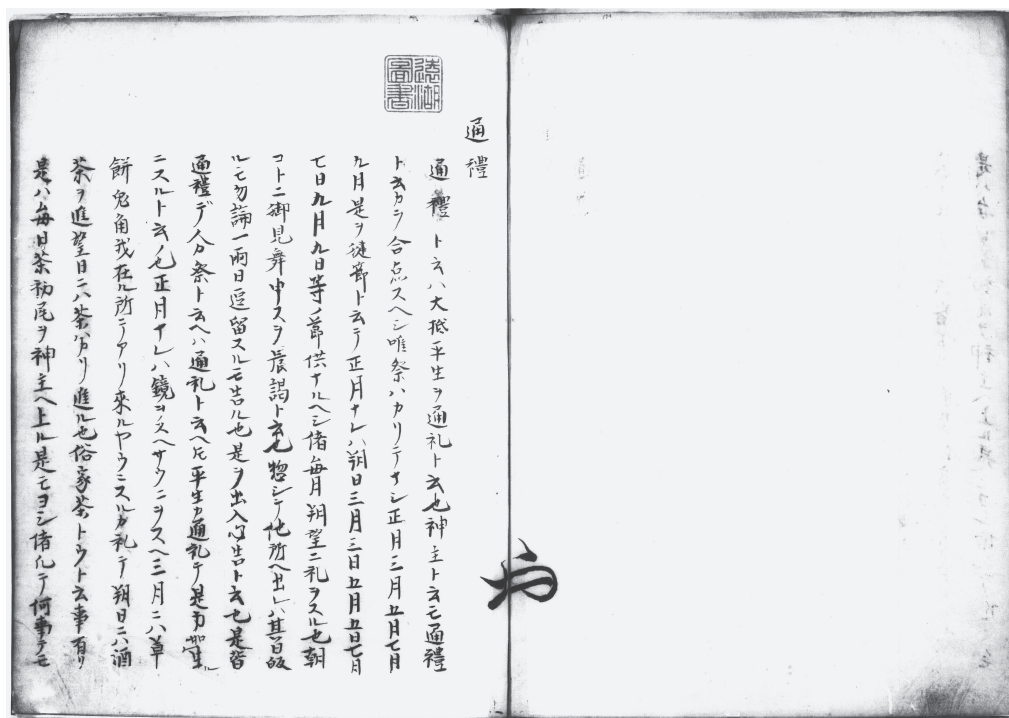


図7 『喪祭略記』（無窮会・平沼文庫蔵）

本書は喪祭に関する綱齋の別の筆記で、冒頭見返しに「喪祭畧記 一冊／浅見綱齋先生草稿門人筆記」とある³⁵⁾。そのことは識語にも、

右宝永七年喪中ニ梅津共軒ヨリ借り寫ス。共軒此時在京也。此ハ浅見先生世間ノ人ノ知り易キ爲ニトテ作ラレタリ。……然レバ是ハ其草藁也。

とあるとおりで、宝永7年（1710）すなわち綱齋死去の2年前、梅津共軒から借りて写された綱齋の草稿であった。梅津共軒は若林強齋の門人である³⁶⁾。

そうであれば、この識語のすぐ前に、

先生來書曰、喪祭略記一閱申候。何レ門人ノ録ト相見□晩年ノ説トハ相違ノ処有之候。爲参考令簽書候。全ク先師ノ説ニ於テ放ニ取舍テハ無之候。晩年承得通ヲ標出スルノミニ候。

とある、その「先生」というのは強齋のことと思われる。これによれば、『喪祭略記』は綱齋の門人の誰かが筆録したものらしいが、晩年の説とは違いがある、そこで晩年に承けた教えのとおりを「標出」したという。これをふまえて本文を見ると「師云、廿八日ニモ茶ヲ薦ム」（2葉裏）などがあるのが強齋に

35) 本書については注8、近藤啓吾「崎門学派に於ける朱子家礼の受容と超脱」106頁が簡単に触れている。

36) 近藤啓吾「梅津共軒の遊学」（注20、近藤『若林強齋の研究』所収）参照。

よる標出(コメント)らしく、「師」とは綱齋であろう。そうすると「師云、先生晩年ノ説、東上トシテ西ヘナラフ」(3葉裏)という場合、「師」は綱齋、「先生」は闇齋ということになるであろう。やや複雑であるが、いずれにしても『喪祭略記』は綱齋の若い頃の講義録であり、晩年の説を強齋がいくらか補筆したものということになる。

さらに本書後半には「神主書法」「墓表石書式」「若林先生神主書式」「墓表」「或人 闇齋先生之學孫 若林先生祭禮雜説ヲ問」の諸篇が続く。このうち「神主書法」では、浅見綱齋の神主書きの識語に、

又按、右先生易簣之前、令山本信義代書也。

とあって、綱齋が死去する直前、山本信義に命じて代書させたものという。山本信義は山本復齋(1680-1730)のことで、これまた綱齋門人である。続いて若林強齋の神主書きや墓表(墓碑)図も載せられており、総じて綱齋から強齋へと継承された喪祭礼に関する崎門派の覚書としてはなほ貴重な資料群となっている。また、上述したように、本書は平田篤胤の手写本らしく、そうであれば篤胤の死生観なり喪祭儀礼を検討する材料にもなるといえよう。

おわりに

本稿では、山崎闇齋とその門人浅見綱齋の『家礼』関連著述につき書誌学的事項を中心に述べてきた。これらの著述はこれまでも知られていたし、また一定程度研究もなされていたが、調査を進めるうち、多様なテキストがあることや写本を実見するのが容易でないことなどから、さまざまな問題が残っていることに気づいた。ここではそうした基本事項に関して考察を行ない、撰述の背景や事実関係について多くの指摘を行なうことができたように思う。

ここで取り上げた闇齋『文会筆録』、綱齋『家礼師説』『喪祭小記』『家礼紀聞』『喪祭略記』は『家礼』に関する彼らの代表的著述である。崎門派は『家礼』の解説と実践にとりわけ積極的に取り組んだ学派であって、本稿の検討が日本における『家礼』ひいては儒教儀礼の受容のあり方をさぐる一助となれば幸いである。